

パネルディスカッション「アイデアコンペと今後の展開を考える」

- コーディネーター 有路 信 (実行委員会副委員長/(社)日本公園緑地協会常務理事)
パネリスト 小林 重敬 (審査委員会委員長/東京都市大学教授、横浜国立大学特任教授)
山崎 洋子 (審査委員会委員/作家)
中村 智子 (一般部門入選/㈱ランドスケープデザイン設計部)
石川 幹子 (専門部門入選/東京大学大学院教授)
星野 裕司 (専門部門入選/熊本大学大学院准教授)
西ヶ谷 保秀 (泉区連合自治会町内会長会会長)
藤田 格 (横浜市都市経営局基地担当理事)

※各者発言は概要を掲載

■それぞれの立場から今回のコンペを振り返る



小林 現地を見た第一印象は、大きさ広さでした。首都圏という大きいレベルで考える一方、地域の方々が色々な形でそこに慣れ親しんでいる。私は、こうした大きな公共と小さな公共の組合せで次の時代の新しい空間を考えることが大きなテーマだと当初考えていました。実際には「新しい公共」はどう考えるのかという提案も中には色濃くあり、緑と食の関係、農の関係という様なものを突き詰めて考えていかなければ、これからの新しい公共を旗印にした空間利用の議論にはならないのではという気がしたのが印象的でした。



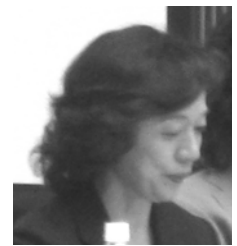
山崎 コンペで作家になった者として申し上げます。入選するには、まずルールをきちんと守ること。テーマがはっきりしていること、分かりやすいことが大切だと思います。

応募作品のレベルは非常に高かったので、落ちた方もがっかりしないでください。



中村 深谷通信隊は近所で馴染みのある場所です。土日はすごく賑わっており、米軍施設と地元が上手く共存していると思います。昼の賑わいとは逆に、夜は本当に暗く、昼と夜という両面から作品を考えていきたいと思いました。地域の知人のアイデアも聞いて作品の参考にしました。

石川 横浜から始める首都圏の環境再生という課題について、首都圏を考えることは世界、地球環境を考えることと受け止めました。水循環、生物多様性、ヒートアイランド、農、今どうしても考えなくてはいけない大切なことを柱に据えて組み立てました。大学は深く考え自分を耕す場です。チームは夏休み返上で取り組み、樹木は一本一本丁寧に全部調べました。土地や場所の持つ歴史に敬意を払う。そこをきちんと知る。こういうことを目標にしてきました。



星野 動機は故郷で何かやっているので参加しようという小さなものですが、関わってみて非常に大きなテーマだと感じました。返還後は少しずつ自分達の手で取り戻して



いくプロセスを大切にし、米軍基地の結界の様なものが少しずつ崩れていけばいいなという思いを作品にしました。作品は、この3ヶ月間で学生とつくった思い出アルバムのようなものです。

西ヶ谷 地元を代表して発言します。コンペの基本的な考え方に「接収の歴史を踏まえ」というのがありました。あの場所は昔から国有地ではなく、農家の方々が昭和12年に旧海軍から僅かな額で強制的に譲渡を迫られるという無念な思いの残る土地であることを、利用にあたって真剣に考えなければなりま



せん。地元の者としては、自然豊かな場所であり、返還後は元の自然に帰するのが基本だと思います。

藤田 横浜市としては市民と行政、議会の熱意を国に伝えて、出来るだけ早く返還が実現するように、原動力になればという思いで、このコンペを実施させていただきました。



■ぜひ実現したいアイデア

中村 今も家庭菜園が盛んな所なので、野菜を育て、調理、食事、学ぶ、農業だけでなく発信の場となる公園が出来たらいいと思います。鉄塔はシンボルタワーとして残し、米軍施設があった土地の記憶として活かせればと思います。そして、昼の景観だけでなく、夜も楽しめる公園になるよう、夜の景観も考えていただきたいと思います。

星野 いきなりではなく、50年くらいかけて少しずつ森に変えていく。地域の人には普通の場所であることが大切です。ここで育った木が横浜中、日本中に広がって行って欲しいと思います。

石川 すぐにできる一歩が大事です。まず行政だけでなく皆で取り組むためのプラットフォームをつくる。そして土地に敬意を払い、森と水環境を回復する。地元のどんぐりから森の赤ちゃんをつくり、沢には多様な生物が住めるエコトーンをつくる。これを優先して欲しいと思います。

山崎 地元と協力してつくり上げるような提案、徐々につくって行って横浜の記憶になるような提案を実現して欲しい。地元の歴史を忘れないよう、中村さんの提案にあるような鉄塔の活用と歴史が分かる施設の併設を望みます。

■実現に向けたプロセスについて

西ヶ谷 行政は今後の返還の取組やスケジュールなど地元にもっと情報を出して欲しい。アイデアコンペをやるだけで返還されたかと錯覚する人もいるので、よろしくお願いします。

小林 計画の実現には資金が必要です。従来型の公共整備や PFI の他に、意義賛同型という第三の手法にチャレンジして欲しい。最近シードマネーと言っていますが、行政などが種になるお金を用意し、その上にアイデア実現のために市民や場合によっては首都圏の方々まで入れて出資者

を募って、10年や20年でなく、100年くらいかけて、後世に伝える新しい空間として甦らせるという意気込みでやったらどうかと思います。

石川 山のようにアイデアが寄せられましたが、一番大事なものは何で、切り捨ててもいいものは何かを見定めることが重要です。行政だけでなく地元や広域の方々も入ったプラットフォームで、捨てる作業をしていくことが大事だと思います。

山崎 地元の思いを第一に考えないといけません。地元の方も、自分たちでは気付かないような、他所の人のアイデアもじっくりと聞いていただいて参考にしていって欲しいと思います。

星野 今日話を聞いて、跡地利用はもう始まっていると感じました。今日は天気がいいし、本当は深谷で話し合えればいいのにと思いました。そういう意識で取り組んで欲しいと思います。



■パネルディスカッションを振り返って

有路 まとめとして、たくさんアイデアの中からグローバルなことと地域をどういう風にマッチングさせていくか。新しい公共の視点、土地の記憶を大事にする



ということは共通認識としてあったと思います。もう一点は、実現に向けて、みんなで議論するプラットフォームづくりが大事だということ、そのための具体的施策として意義賛同型というご提案もいただきました。そういうことも踏まえて、今後、横浜市が中心となって検討していただきたいと思います。

* * *

(この他、会場の参加者からも多数の発言をいただきました。)